

大人の発達障害って そういうことだったのか その後

宮岡 等, 内山登紀夫【著】

評者

兼本浩祐

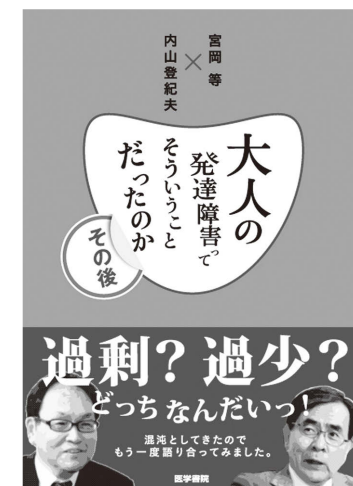
愛知医科大学精神科学講座

読んで多くの項目に一々そうだと
そうだと頷くことが多く、一気に
最後まで読み進むことができた。
大人の発達障害は今や精神科の臨
床の中で常に意識をせざるをえな
い事項であり、どうやってこの概
念なしに我々が二十世紀には臨床
をやっていたのかが分からないほ
ど今や我々の臨床に溶け込んでい
る。先日日本精神神経学会でも
本書は売上一位を連日続けていた。
いくつか激しく點頭したい項目
を抜き書きしてみた。

まずは、診断だけを告知して送り
つけてくるのはやめて欲しいとい
う件だろうか。そもそも発達障
害というのは、統合失調症やうつ
病、いわんやてんかんなどとは診
断の意味が異なっていて、同じ診
断という名前を冠にしているもそ
の実態は大きく違う。たとえば
我々誰もが自閉症スペクトラムの
傾向性はあって、違うのはそれが
1なのかうなのか9なのかという
程度の問題であり、その傾向性を
念頭において診療をすると、中
には随分治療的介入のフォーカス
を絞ることができる人がいる。し
たがって、自閉症スペクトラムとい
う特性を念頭において、それをい
かに臨床の中に組み入れて行くの
か、あるいはいかないかは、来
院してこられる家族・本人とのや
り取りの中で個別に、オーダーメ
イドで一人ひとり考えなければな

らず、そこには診断をどのように
告知し、どのように治療に組み込
むか、あるいは事例化して医療が
引き受けるかどうかまでの幅広い
選択肢がある。あらかじめ、本当
かどうか分からない自閉症スペ
クトラムの診断をつけられての来
院ということになると、こうした
枠組み作りの大きな妨げになるの
は間違いない。大人の発達障害の
ための専門施設を対外的に喧伝し
膨大な公的予算を消費しているよ
うな場合は別であるが、診断をし
た医師が治療も行う、治療を行
わないなら診断はしないというの
は、確かに意識化しておいてよい
重要な指摘だと大いに得心するこ
ろがあった。

次にあげるとしたら、発達障害
を診断名として使わないことであ
ろうか。自閉症スペクトラム自体
が非常に幅広くかなりヘテロな傾
向性の集合体であるが、注意欠陥
多動性はそれとは独立した傾向性
であり、さらにいえば発達性強調
運動障害とか、読字困難を始めと
する学習障害など、脳機能の数だ
け発達障害も種類があるのは間違
いない。これを全部一くくりにし
て取り扱うのは当然乱暴この上な
い話しであり、少なくとも診断と
いう名には値しないことは著者ら
の言う通りであろう。発達障害と
いえば自閉症スペクトラムのこと
を指すことが多いが、花は桜と



いった用語法であり、医学的な診
断名にはなじまない。

いずれにせよ本書を通して強く
感じられるのは、診断ということ
の意味を発達障害ほど私達に突き
つける状況は他にはないというこ
とである。最近、「発達障害か
どうかを判定して欲しい」という
主訴で来院される方が少なからず
ある。本来は主訴があり、主訴を
どう治療するかということを考え
るための手段として診断はあるは
ずなのだが、AQとか知能テスト
など目に見えるもので診断の白黒
がつかないと納得できない方もあ
る。自閉症スペクトラムの診断
は、あくまでも人生をよりよく過
ごす手助けをするためのツールで
あることを考えれば、診断で終わ
りではなく、診断してそれからど
うするのが問題となるはずだが
、現状ではしばしば診断それ自
体が社会的・心理的に大きな影響
を与えてしまう。著者らの言うよ
うに大人の発達障害は、精神科医
に突きつけられた大きな試練であ
ることは間違いない。

A5判・頁330

2018年7月

定価：本体3,000円＋税

[ISBN978-4-260-03616-0]

医学書院刊